

## 待降節第一主日

2012.12.2

ルカ 21・25-28, 34-36

今年も待降節を迎えました。今年もというふうに申しましたが、これは世間一般の言い方です。私たちの普段の生活感覚、その中での時間感覚では、先週の日曜日の年間最後の主日、王であるキリストの祭日と今日の待降節第一主日との間には、いつもの一週間の時間が経過しただけです。そのような私たちの時間感覚に従えば、今日の待降節第一主日は気がついてみるとまた一年が過ぎて、今年も待降節の時期を迎えたということに過ぎません。

けれども教会の典礼暦は、そのような私たちの上を流れる、先週の日曜日と今日の日曜日の一週間の時の経過に、私たちが生きる一年一年の人生の時の流れに大きな楔を打ち込みます。その楔とは、毎年、先週の王であるキリストの祭日と今日の待降節第一主日のミサの中で繰り返し朗読される、この世の終わりを告げる終末の福音です。教会の典礼暦はこのようにして、この世の時間の流れの中に生きる私たちに、それはいつか終わりを迎えるという終末の福音をもって警告を与え、終わりある今の時が、いのちの与え主である神からの恵みの時であり、与えられた使命を果たすべき時であることを告げているのです。教会の典礼暦は今日の待降節第一主日をもって、一般の暦よりも一足早く、2013年の幕を明けました。今日、待降節第一主日は教会が迎える新たな年の初めです。その年の初めの最初の主日に朗読された福音が、この世の終わりを告げる終末の福音であることに、教会とその子らである私たちの信仰に基づく独特の時間感覚が表れています。

限りあるこの世の生を生きる者たちは等しく、この世の生が尽きる、終わりの時に向かって今の時を生きています。そのことだけなら、聖書を開いて見るまでもなく、古今の心ある人々が見つめてきた、この世のいのちを生きるものたちのいのちの実相です。けれども、一般にはめでたいはずの年の初めに終末の福音を置く、教会の典礼暦とそれを生きる私たちの信仰は、終わりの時に向かって流れる自然の時の流れと、その流れに抗する術もなく、時の流れのままにそれに従って生きざるをえない私たちの自然のいのちのありように対して、どこまでも挑戦的な姿勢を持っています。

終末を告げる福音は、私たちの心を終末に対する恐怖や、嘆きや、諦めに導くものではありません。そのような心のありようから生じる、現実逃避の来世願望や、現実軽視の投げやりな生活態度に導くのもありません。一年の初めの、今日の待降節第一主日の終末を告げる福音は、私たちに、「身を起こして、頭を

上げる」こと、そして「いつも目を覚ましている」ことを求めています。これが、福音のみことばを通してこの世の終末を知った者の生活態度であると、今日の福音は私たちに呼びかけているのです。身を起こし、頭を上げ、目を覚ましているのは、終末をしっかりと見据えて生きるためです。全てのいのちを滅びへと向かって押し流す時の流れに、身は流されつつも、そしてそのことを十分に意識しつつも、落ち着いて冷静に今の時を生きるためです。終末の福音は、私たちがそれから受ける最初の印象とは違って、私たちに真に現実的な生き方、真に人間にふさわしい生き方へと招いているのです。

けれども、終末をしっかりと見据えて生きるためには、この世の全てはやがて終末を迎えるということ意識するだけでは十分ではありません。私たちがやがては迎えねばならない終末の時は、私たちにとって解放の時であると今日の福音は私たち告げています。この終末イコール解放の時の福音のメッセージが、終末を意識しつつ生きる私たちの心から悲壮感を振り払ってくれます。終末自体は私たちにとって悲劇的なことです。けれども、その悲劇的な終末の現実に向かつて生きる、私たちの心が悲壮感に覆い尽くされないのは、私たちにとっての終末の時が、私たちにとっての解放の時であることを、福音によって知ったからです。更に、私たちが知った福音によれば、終末そのものがいれば自然に、自動的に私たちに解放の時をもたらすというわけではありません。

終末のときの解放は、天の雲に乗って来られる「人の子」によってもたらされるのです。この「人の子」の到来まで視野に入れていることによって、終末を語る聖書のことばは、福音のみことばとなるのです。

新しい典礼暦の最初の主日に、この世のすべてのものの終わりを告げる、終末の出来事に心に向けるのは、その先に約束されている、私たちにとっての真の解放者、この私たちの世界にいつか再び来られる「人の子」、私たちの主イエス・キリストへの希望のうちに、新しい年を迎えるためです。新しい年を迎えるたびに、私たちは確実に、私たちの終末に向かう新たな一歩を踏み出し、同時に、私たちの希望、「人の子」私たちの主イエス・キリストがもたらす解放の時に向かつて、人生の新たな局面を迎えるのです。

一言大切なことを付け加えるとすれば、「人の子」の到来を告げる終末についての聖書のことばが私たちにとって真に福音であるのは、これらのことばが、十字架の上に死に、葬られ、死者の国にくだり、三日目に死者の中から復活されたお方のみことばであるからです。終末の福音が私たちにもたらす希望は、イエスの過越しの出来事、その十字架の死と復活に根拠付けられているのです。イエス・キリストの十字架の死と復活を信じる信仰によって、私たちは、全て

の者がいずれは迎えねばならない終末の先に、なお希望を持ち続けることの出来る、終末の恐怖とそれがもたらす私たちを覆ういかなる無力感にも屈することのない、絶対的な希望の根拠を見出すことが出来たのです。

私たちが受け入れたキリスト教の信仰においては、旧約の預言者が告げた終末の「人の子」は、私たちが生きるこの世の生の中に、私たちと同じ一人の人となって、聖母マリアから生まれることによって「人の子」となり、十字架に至る人生を歩まれたナザレのイエスその方です。私たちが洗礼を受けることによってその中に生きている私たちのカトリック信者として信仰によれば、十字架の上にこの世の生涯の終末を迎えたイエスは、その生涯をかけて証した全能の父である神の力によって死者の中から復活し、全てのものが迎える終末の時に、旧約の預言者が告げているとおりの「人の子」として、天の雲に乗って、父なる神のもとから私たちをその永遠のいのちに迎え入れるために、再び私たちのこの世界に来てくださるお方です。

教皇様の呼びかけに応じて、私たちはこの一年を私たちが受け入れたカトリック信者としての信仰を新たにするための「信仰年」として生きようとしています。今日、その信仰年の待降節第一主日を迎え、これから始まる待降節の日々、終末の滅びへと向かう私たちのこの世のいのちの日々の生活の中に、それに屈することのない希望の根拠をもたらしするために聖母マリアからお生まれになった、「人の子となられた神の子」イエス・キリストを、新たな心でお迎えする用意を整えて行きたいと思えます。そのためにも、今日の福音の勧めに従って、目を覚まし、身を起こし、頭を上げて私たちの日々の務めに立ち向かってゆきたいと思えます。いつかそれから解き放たれる日が、私たちにとって、私たちの主イエス・キリストによってもたらされる真の解放の時、真の安息の時となることを忍耐強く、辛抱強く祈ってまいりたいと思えます。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高